

78人の園児を育む神崎保育所の新園舎が完成

待望の新空間が誕生

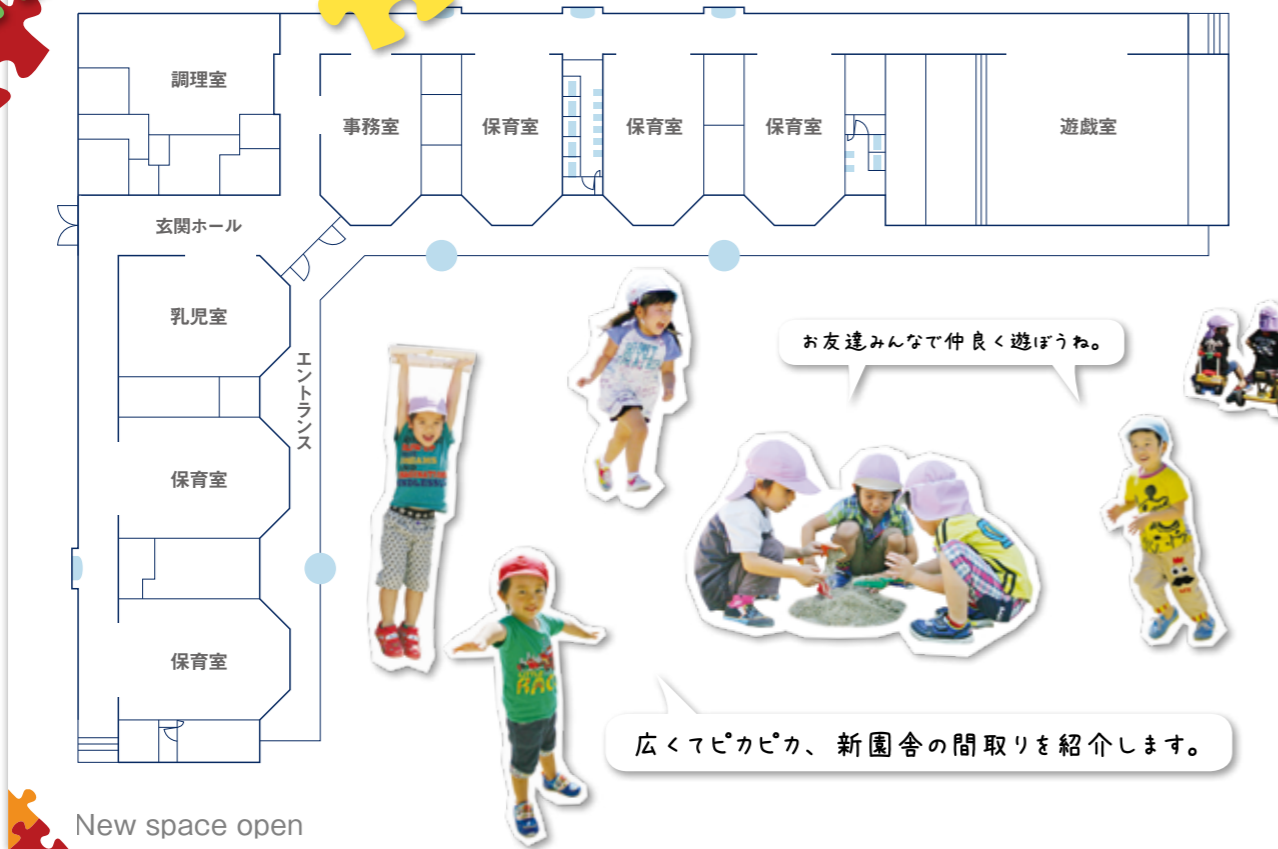
ぬくもりあふれる木の香りと、やさしい光が調和した癒しの空間——。園児たちの健やかな成長を願うたくさんの想いが込められた園舎が、ついに完成しました。ここで、その特徴をご紹介します。

健やかな成長を手助けする個性豊かな新園舎

色あせた外壁、黒ずんだ床、壊れかけの遊具…役目を終えた園舎の一つ一つを構成する部分にたくさんの思い出が詰まっているように、新園舎にも、たくさんの想いが込められています——。老朽化が進み、耐震強度も不足していた神崎保育所の改築工事が、約9か月間の期間を経て8月末に竣工。10月1日から78人の園児がここで育まれていきます。

セプトに設計され、そのこだわり空間には、大きく分けて2つの特徴があります。まず第一に、保温性や調湿性、断熱性などの性質がある「木」をふんだんに使用していることです。乳児室や保育室、廊下などには「ヒノキ」が用いられ、柱やドアなどの細部にも「木」にこだわっています。「廊下を踏みしめ、香りと感触を楽しみながらぬくもりを感じる」そんな思いが建物全体を包んでいます。次に、「明るさ」。各部屋の大

きな窓は、太陽の光を存分に受け入れるとともに開放感を提供。屋外のエントランスは個性を象徴するかのよう七色に輝き、園児たちの笑顔をさらに引き立てます。限られた時間、限られた予算で、最大限の効果を生み出すように試行錯誤を重ねて造られた神崎保育所の新園舎。園児たちが毎朝通うことを楽しみにするよう、郷土の自慢として後世まで誇れるような、ぬくもりとやさしい光に包まれた空間が、ここに実現しました。



New space open



3歳児以上の保育室には横3.6m、縦2.5mの巨大ホワイトボードを設置。何度でも書き直せるため、思い思いの絵を自由に描けます。



園舎の中心部分に位置する玄関ホールは約37㎡で、ゆとりと開放感ある設計に。人が込み合う送迎時を想定したスペースを確保しています。



運動会も楽々行える広い運動場。園児が所狭しと走り回れるよう、旧園舎の解体工事後は、さらにその面積が拡張されます。



廊下の突き当たりにある約110㎡の遊戯場。演台もあり、発表会などのときには保護者もゆったりと入るスペースが設けられています。



外には足洗い場が3か所、中には手洗い場所を4か所完備。園内の衛生を保ち、園児たちが常に清潔でいられるよう配慮されています。



2歳児が生活する保育室には、シャワーも備えられたトイレを配備。おまるなども用意され、トイレの練習が行えるようになっています。



昭和51年に建設された神崎保育所の旧園舎。惜しまれつつも、10月から解体工事が行われる予定で、その後グラウンドや園庭の一部として生まれ変わります。

Interview 岩崎ヒデ子 園長

たくさんの思い出がつまった旧園舎がなくなるのはさみしいですが、園児たちには旧園舎と同様に、新園舎でも伸び伸びと健やかに成長しながら、たくさんの思い出を残してほしいです。



↓ 神崎保育所の新園舎は採光を配慮し、L字型に設計。運動場部分にあるエントランスには、ウッドデッキと特徴的な七色に輝くサンルーフが設置されています。